



上海・杭州の旅

竹本喜一*

私は昨年秋、中国にはじめて訪れる機会を得た。中国科学院からの招へいによるもので、1ヵ月間彼の地に滞在し、各地の大学や研究所で講義や講演をするのが目的の旅であった。ちょうど日中友好の最高潮のときでもあり、また訪中の日本人ともほとんど接触をもたない、独り旅だったので、大へんユニークな経験をするのも多く、毎日をたのしくすごすことができた。

私は、専門である機能性高分子の集中講義を北京、合肥および上海の3カ所ではぼ一週間づつ行うことになっていた。2年前に四人組が追放されて中国は暗黒の世から今は完全に解放されルネッサンスの到来を思わせるものがあった。人々は学問を求めると極めて熱心で、各地の研究所や大学での研究もようやく軌道にのり、中国化学会も学会活動をこの年から再開するに至っていた。そんなわけで私の講義も、若い研究者を中心に学生を交えた形で、いつも大入り満員の盛況で、広い講義室に入りきれないほど多くの人が聴講してくれた。遠く成都や武漢などの大学から来た熱心な研究者もあった位である。

1. 上海の旅

旅の後半に予定されていた上海では、私は主としてこの有機化学研究所を中心として活動することになっていた。私は晩秋のさわやかな日に、北京の化学研究所の江英彦さんと二人で上海空港に降り立ち、そこで有機化学研究所の屠伝忠先生らの出迎えをうけた。空港から都心に通じる街路の両側には黄色にいろづいた並木が旅人の目に美しく映えた。

上海の有機化学研究所は、化学系としては海

外に最もよく知られており、インシュリンの全合成など多くの国際的な業績に輝く研究陣を擁している有名な研究所である。1950年、解放の直後に都心の中山公園の近くに創設されたが、1958年には研究所も大きく発展し、高分子化学などを中心とする化学研究所がここから分かれて北京につくられるに至ったという。以前に R. Kuhn 教授の許に留学したことのある王所長が出張中のため、つぎの日黄耀曹副所長の案内で研究所を見学することになった。現在この研究所は総員1300名の大世帯で、そのうち化学技術者は600名から700名位ということであった。

有機化学研究所の仕事は、大きく眺めると二三の方向をもっていた。その一つは、何といっても中国のユニークな、天然有機化合物の領域の仕事であろう。多くの人が、とくに漢方薬の有効成分についての研究にとりこんでいた。一つのテーマは「天花粉」であって、これは明の時代にすでに文献にくわしく述べられている、古代から中国に知られた避妊薬であるが、大根のような塊根から抽出したものの構造決定が行われていた。薬効のあるただ一つのタンパク質が純粹に分離され、ベックマン社製の装置を用いて、シーケンスの決定がちょうど成功したところであった。そのものの結晶化にも成功し、みごとな写真をみせてもらうことができた。もう一つのテーマは「青蒿素」という抗マラリア剤の有効成分の構造決定で、化学的方法を駆使して、複雑な立体装置がもとめられていた。他の大学でもこのような天然物の構造を探索する研究は盛で、大豆や落花生にはえるかびの一種で、発癌性のあるものの研究もなされているとのことであった。他に、すでに市販されている人工血液としてのアミロースのカルボキシメチル化物の合成や核酸化学の仕事などに加

* 竹本喜一 (kiichi TAKEMOTO), 大阪大学工学部, 石油化学科, 教授, 工博, 高分子化学

えて、石油タンバクのテーマもとり上げられていた。

二つ目の研究方向は純有機化学に関するもので、金属・チッ素配位化合物や、ヒ素をふくむイリド類の合成、フッ素をふくむ材料や、二三のリン化合物に関する研究に興味があった。この中でチッ素の配位化合物は、現在世界的に有機金属化学の分野で関心をあつめている空中チッ素固定の研究につながるものである。またこの中国では希土類化合物が世界的に多く産出され、長沙という町に希土類研究所もあると聞いたが、上海の研究所でも希土類の分離や応用に関する研究が行われていた。ほかにも液晶の研究や分析化学にたずさわる人も少なかったように思う。

研究所は上海の中心に近く、市の西南の一地域にあって、まわりに生物系や医学系の研究所がある。自然科学を中心とする復旦大学や同済大学、上海科学技術大学をはじめ多くの大学もあるし、市の郊外には有機化学研究所付属の実験工場があって、研究所で成功した仕事の展開も行っていた。

私の上海滞在の一週間は、市の中心部の茂明路にある錦江飯店ですごした。中国科学院から最高の接待を受け、いつもいろんな先生方や案内の人が身のまわりの世話をしてくれ、どこへ行くにも専用車が用意されていた。しかしたまには夜の繁華街へひとりで出てみたり、壁新聞を眺めたりする楽しみをもつことを忘れなかった。仕事のない晩には、上海雑技団による有名な中国の曲芸や手品を見たり、古い劇を観賞する機会をもった。私は旅のはじめ、北京ですばらしい京劇を見てから中国の民族色ゆたかな古典劇に半ばやみつきになり、機会あるたびに各地で案内してもらったので、3日に一度位の割合で催し物に接したように思う。いま中国では西欧のバレエ白鳥の湖をはじめ、古い劇が復活し項羽と虞姫の物語や、三国志にまつわる多くの公演が盛んな人気をあつめている。上海歌舞団による諸葛孔明の物語や白蛇伝のすばらしい演出も忘れることができない。

北京と同じく、ここ上海でも日本人をはじめ、多くの外人を見かけた。北京の場合は観光

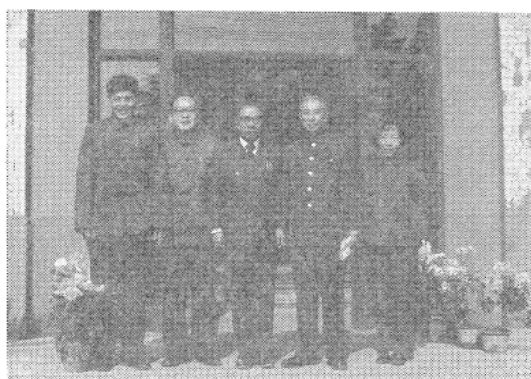


写真1. 上海市. 有機化学研究所にて(左より江英彦, 屠伝忠, 一人おいて黄副所長の各氏, 中央は筆者)

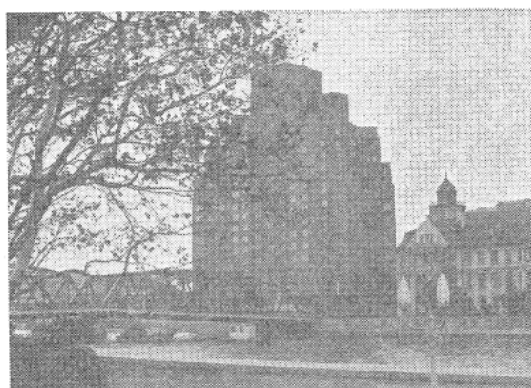


写真2. 上海市. 黄浦公園のほとり(正面のビルは上海大厦)

客が多かったが、上海では商社の人や技術者が中心で、欧米人のホテルへの出入りもかなりはげしい様子であった。上海の北郊、揚子江の南岸に宝山という処があって、いま日本の技術を取り入れて大きい鉄鋼コンビナートの建設が大規模に進められている。私の滞在中、当地の新聞にこの記事がくわしく報ぜられ、工業設備の他に環境保全や自動化コントロール、計量技術などさまざまな問題を解決するために研究所の建設が近く行なわれることが書かれていた。同じ日の新聞にもう一つ注目すべき記事があった。それは「双肩挑」と題するトップ記事で、中国科学院の上海分院の問題とあるので読んでみると、今までトップの座にある官庁の役人が党の仕事と同時に分院長の職を兼ねて来たが、これでは分院の方はどうしても片手間仕事になって、實際面を仲々把握できない。それで経験豊かな分院長をえらんで、その人が逆に上部の党の仕事を担っていかうとする考えのようであ

った。つまり年寄りの整理を行って人事を実質化しようという、新しい政策の一つの現われのように思われた。文化大革命にうつつをぬかし、近代化を忘れて遊びほうけていた連中の整理が、やっと末端まで終って一段落した今は、新しい方向に添った人事の確立が各方面で急がれはじめているように感じた。

上海の都心部に、黄浦江という大きい川が流れている。その河岸にはひと昔前の高層建築が軒を並べ、神戸港のような感じがあった。黄浦江に合流するもう一つの川があって、その合流点近くに上海大廈という上海第一の大きいビルがありホテルになっている。その前に、多分戦前に架けられたと思われる大きい道路橋があって、夕ぐれ時に散策していると、イタリアのゼノアか、神戸を歩いているような、中国ばなれした雰囲気があった。川辺の黄浦公園には晩秋の気配が漂い、若いカップルの姿があちこちに見受けられた。

2. 杭州の旅

上海滞在中、ぜひ訪れてみたいと思っていた杭州へも、二泊三日の旅をアレンジして頂いた。上海から私は列車を利用して12月のはじめの夕ぐれに、杭州の駅に降り立った。

西湖のほとりに立つ杭州飯店というのが、私の宿であった。ここでも浙江大学の先生方の歓迎をうけ、忙しい三日間になってしまった。

杭州は二千年もの昔から広く知られ、隋、唐の時代に栄えた古い都で、寺院、仏閣などが沢山残されているが、何よりも市の中心に風光明媚な西湖をかかえ、気候も温暖でその昔の西施ゆかりの美しいまちである。私の滞在中は天候にめぐまれたが、雨の日に湖岸を散策してもまた旅情一しおであらうと思われた。

東方見聞録によると、13世紀にはマルコポーロが当時臨安と呼ばれたここ杭州に滞在したというが、この湖の風景や遺跡のたたずまいはおそらくその当時そのままであるにちがいない。私はその昔、北宋の詩人蘇東坡のつくったといわれる蘇堤や、白蛇伝の伝説で名高い断桥などを歩き、また千年も以前に建てられた六和塔に登って、銭塘江に悠然と浮かぶジャンクを眺め

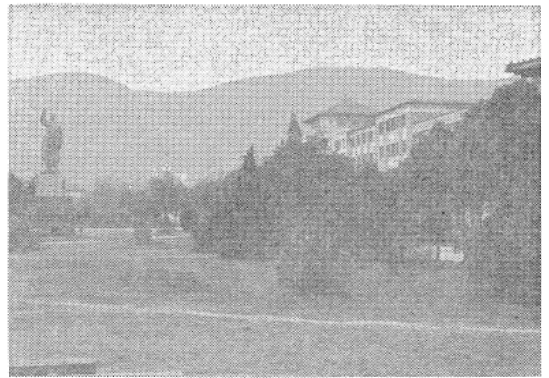


写真3. 浙江大学のキャンパス



写真4. 杭州. 西湖の岸边にて

ながら、古い歴史を心ゆくまで偲ぶ、といった幸せな一日をもった。西湖に舟を浮かべ、湖中の小島に上陸して三潭印月と呼ばれる名勝地にも足をはこんだが、そこには米人の観光客も沢山訪れていた。

私は杭州滞在中の一日を、この地の浙江大学ですごした。杭州には総合大学としての杭州大学はじめ農業大学や医科大学などもあるが、この浙江大学は理工科系の大学で、私の専門である高分子化学の研究者も何人か居られた。聞けば北京の化学研究所の王教授も、銭人元教授もこの大学の出身ということであった。80年の歴史をもつ由緒ある大学だが、私の訪れた年に中国科学院直属の大学となって、合肥の中国科学技術大学と同じく、これからは優秀な学生を集めることができると大よろこびであった。

浙江大学は数学、物理、化学、力学、地学、電気、機械、化学工業、工業機械、土木、熱物理行程、化学機械試験、無線、計算機および材料といった15の系より成っており、現在教職員1700名、学生5000名の規模をもつ大学である。

日本の大学院生に相当する研究生も160名ほどいるが、将来大学の充実とともにもっと多くの学生を集めたい意向のようであった。このうち化学系というのは現在のところ高分子化学が主で、アニオン重合や配位重合といった基礎研究のほか、重合反応工学をやっているグループも見られた。

午後のひととき、この大学の化学系の朱自強、潘祖仁らの先生方としばし歓談してから、私はこの旅最後の講演をここの大学で行った。短時間のため、北京や上海で行った機能性高分子の講義のエッセンスだけをまとめたものにな

ってしまったが、ここでも沢山の研究者や学生さんが聴講し、その熱心さに胸をうたれた。私は多くの人と名残を惜しみながら12月4日の晩、杭州をはなれた。

単身の旅ながら私の中国滞在の一カ月は、全く充実してたのしくすばらしいものであった。私を講義に招へいし、全く自由に各地を旅し、見聞をひろめる機会を与えて頂いたのは中国政府および中国科学院のおかげである。とくに一カ月の間ずっと私の通訳の労をとって下さった学生時代の親友、江英彦君には感謝の気持で一杯である。



限りある資源を大切に…… の姿勢を守るDNT

現在は、“鉄の文明”と評され、今日の世界から鉄を無くしたら、恐らく一切の文化は終息するだろうといわれています。

DNTは、創立の礎となった重防食塗料「ズボイド」を通じて既に半世紀近く私たちの大切な鉄を守りつづけてきました。

そして、これからもDNTはズボイドを生みだした重防食技術をベースに、独自の技術開発を進め、さらに、海外の優れた技術と協力しあって、より優秀な重防食システムとして結合させ、限りある資源を守りつづけていきます。

●創造と調和をめざす●

DNT
大日本塗料

●大阪市此花区西九条6-1-124
〒554 ☎(06)461-5371(大代)
●東京都千代田区丸の内3-3-1
〒100 ☎(03)216-1861(大代)